

財務会計論



財務会計論-計算担当
新井 良明 講師

本試験を振り返って ～出題傾向・合格ライン等～

久野 最後に、5月25日第3限に行われた財務会計論です。出題は、例年通り、8点問題が18問、2つの総合問題の形式をとった4点問題が14問の合計32問、満点200点でした。

新井先生、先ほどは「本試験最後の科目である財務会計論まで集中力を切らさなかったかどうか、勝負の分かれ目だった」ということでしたが。

新井 今回も例年通り、配点8点の問題が18問、4点の総合問題形式が大問2つで14問の計32問構成でした。しかし、理論の市村先生と、今回の試験問題について計算分野と理論分野に振り分けていた時に「あれっ」と思いました。8点問題については、例年計算分野が8問、理論分野が10問という割合での出題が多かったのですが、今回の試験は計算分野、理論分野ともに9問ずつ出題されていたからです。

財務会計論-計算分野が得意な方は計算分野の配点が増えた分ラッキーと思った人もいたのではないのでしょうか。また、計算が増えたことに伴い、問題全体の解答時間に対する影響も考えましたが、時間内に解答可能な分量であり、問題ないと言えるでしょう。

ただし、企業法、管理会計論及び監査論と3科目の後に財務会計論が始まりますから、ここまで頭をフル回転させた状態で財務会計論に臨むわけですね。そんな中、前の科目の手応えを引きずってしまったり、集中が切れて気が抜けてしまうと思うように実力を発揮することができません。最後まで諦めない気持ちで試験に臨んでいたかどうか大事になると思います。

久野 制限時間内に対応できる出題ボリュームの場合は、集中力、重要ですよね。やらかし、ができない。

さて、市村先生、「計算を制するものが財務会計論を制する！」と先ほど言われてましたが、詳しくお願いできますか。理論面全般的な話でOKですが。

市村 昨年度平成25年第Ⅱ回短答式試験や本年度平成26年第Ⅰ回短答式試験では、**財務会計論-理論**の問題が10問あったのですが、今回は32問中9問と1問減っています。また、理論では久しぶりの感じがしますが、難易度が高くなりやすい正誤個数問題が登場したところが形式面での変化と言えますね。

久野 久しぶりの感じがするだけ、じゃないですか？

市村 正誤個数問題の前回の出題は、平成25年第Ⅰ回短答式試験でした。久しぶりではないかもしれません。

久野 傾向、難易度、過去問との類似性など気がつかれたことはありますか。

市村 計算の出題割合が増えていることでしょうか。理論では、後半に難易度が高くなりやすい正誤個数問題や正誤選択問題がありましたが、前半は比較的解きやすい問題が多かったのも、昨年度平成25年第Ⅱ回短答式試験や本年度平成26年第Ⅰ回短答式試験と概ね同程度の難易度だったと思います。過去問と似たような問題は出題されていますが、短答答練や短答フォロー講義で触れているので、解答上は、特に問題ないかと思います。

理論の問題が1問8点であることが明記されている点は本年度平成26年第Ⅰ回短答式試験と同様の出題形式ですが、1限目の企業法や2限目の管理会計論・監査論の情報から、もしかしたら財務会計論も出題形式に大きな変更があるかも…、と構えてはいましたが、フタを開けてみれば例年とは変化なしで、この点でまずは安心しました。具体的には、ア～エまでの4つの文章の正誤を判定し、組合せから解答を選ぶものと、1.～5.までの5つの文章の正誤を判定し、1つの解答を選ぶものとがありました。TACの答練では、いずれの形式も想定した上で出題していましたので、TACの答練を受けていた受験生は違和感なく本試験問題を受け入れられたと思います。特に受験生にとっては、出題形式の変更は

財務会計論



財務会計論-理論担当
市村 瞳 講師

本試験を振り返って ～出題傾向・合格ライン等～

それだけで面を喰らってしまい実力を出せないこともありますので、変更がなかったことはやっぱり嬉しかったです。

久野 財務会計論は個別問題・8点問題で、計算が1問増加し、理論が1問減少したということですね。

それでは、個々の問題についてコメントをお願いします。問題1、理論ですから市村先生からですね。

市村 問題1は「財務会計の概念フレームワーク」からの出題です。本問は正答して欲しい問題でした。イヤウの肢は自信を持って「正しい」と判断できたはずですし、アやエの肢についても「誤り」と判断できたと思います。問題1が非常に難しかったりすると、その後の解答のペースに影響するのですが、今回はスタートダッシュをかけられたのではないのでしょうか。

久野 次は、計算、新井先生ですね。問題順をお願いします。

新井 問題2は「本支店会計」の問題です。X商品とY商品を本店及び2支店で保有しており、それぞれの商品で原価率が異なるため、内部利益の算定を誤りがちな問題です。内部利益が生じている商品及びその金額を正しく把握した上で解答できたかがポイントです。

市村 問題3は「資産会計総論」からの出題です。本問も正答して欲しい問題でした。アの肢は正誤の判断が少し難しかったかもしれませんが、イの肢が「誤り」、ウの肢が「正しい」と判断できたはずですし、エの肢についても、落ち着いて期末在庫数量と最終仕入数量の関係を把握すれば「誤り」と判断できたと思います。

新井 問題4は「現金及び預金」の問題です。基本的な問題ですので、確実に解答していただきたい問題です。

市村 問題5は「固定資産」からの出題です。もしかすると、本問は数値が入っているから計算の問題と感じた方もいるかもしれませんね。確かに、資料に数値が与えられてはいますが、複雑な計算が求められることはなく、電卓を使わなくても正誤の判断がつくと思います。土地Aが賃貸等不動産、土地Bが棚卸資産、土地Cが固定資産であることに気づけば、難なく正答できる問題でしょう。

新井 問題6は「有形固定資産・繰延資産」の問題です。A社機械の減価償却費計算において200%定率法が問われています。償却保証率や改訂償却率が与えられていないため、問題文をヒントに均等償却による減価償却費を計算することとなりますが、講義であまり触れていない部分ですので解けなくても仕方がなかった問題です。

問題7は「分配可能額」の問題です。その他有価証券評価差額金に係る分配制限及びのれん等調整額に係る分配制限が問われています。落ち着いて解いていただければ解答できた問題です。

市村 問題8は「損益会計」からの出題です。本問も正答して欲しい問題でした。アの肢が「正しい」こと、ウの肢が「誤り」であることは答練で同様の問題を出題しているので判断できたでしょうし、エの肢についても、例えば、回収期限が到来していない状況で決算日を迎えた場合に処理が必要になるかをイメージすれば発生主義の適用とは言えず、「誤り」であることを判断できたと思います。

問題9は「会計上の変更及び誤謬の訂正」からの出題です。本問も正答して欲しい問題でした。今までずっと「本問は正答して欲しい問題です」ばかり繰り返していますね。本問は、どの肢から検討しても構いませんが、アが「正しい」肢、イが「誤り」の肢であることが分かれば、答えは1つに絞られるので、容易に正答できたと思います。

久野 次の問題10は悩ましいようですね。

新井 問題10は「有価証券」の問題です。保有目的区分の変更が問われていますが、悩ましい問題でした。

C社社債の処理について、満期保有目的の債券をその他有価証券に振り替える際、振替時の償却原価に基づいて振

り替えます。その後、その他有価証券に振り替えられても償却原価法（定額法）が引き続き適用されますので、決算日において、振替時から決算日までの償却額の計上が行われ、期末における償却原価と期末における時価の差額に基づいてその他有価証券評価差額金を求めるはずなのですが、選択肢に該当する数値はありませんでした。一方、振替時における償却原価と、期末における時価の差額に基づいて、その他有価証券評価差額金を求めると、選択肢4. に辿り着きます。解答上は「解なし」としていますが、選択肢から判断すると4. が解答となる可能性が考えられます。

問題11は「デリバティブ」の問題です。オプション取引に係る損益の算定が問われています。平易な問題でしたので、確実に正答していただきたかったです。

問題12は「ストック・オプション」の問題です。公正な評価単価を変更する条件変更が問われています。12月決算のパターンは見慣れないかもしれませんが、それ以外は基本的な内容ですので、こちらも確実に解答していただきたい問題です。

市村 問題13は「リース取引」からの出題です。本問はウの肢の正誤判断がつきに良かったと思います。借手のファイナンス・リース取引における具体的な注記の内容まで押さえている方は少なかったでしょうし。でも、アとエの肢が「正しい」と判断できれば、消去法で正答を出せたと思います。



問題14は「退職給付会計」からの出題です。本問は正誤個数問題であるため、比較的難易度が高い問題だったと思います。すべて正しい肢なのですが、自信を持って「0個」と判断できた方は少なかったのではないのでしょうか。特に、長期期待運用収益率が利息費用の計算に適用される割引率を下回る状況が有り得るのかと思って、イの肢を「誤り」と判断してしまった方も多かったのではないかと思います。

問題15は「固定資産の減損」からの出題です。本問は正誤個数問題ではありますが、短答答練や配布問題で出題しているような肢も多く、比較的解答しやすかったのではないかと思います。アとオが誤りであることは判断できでしょうし、少し判断に迷うかもしれないウについても問題文に「必ず」と書いてあるので、本当に「必ず」なのかを検討すれば「誤り」の肢であることは判断できますからね。

新井 問題16は「税効果会計」の問題です。各取引から生じる法人税等調整額について借方と貸方を間違わないよう注意しながら、確実に解答していただきたい問題です。

問題17は「外貨建有価証券」の問題です。C社社債に係る償却額の算定について、問題に与えられた資料を見ると、X6年度の平均相場と、C社社債の取得日からX6年度決算日までの平均相場が与えられています。実務指針に基づくと、X6年度の平均相場を用いて償却額を換算した選択肢3. も誤りではないと考えられますが、理論的な平均相場は、償却額を計上する期間に対応するC社社債の取得日からX6年度決算日までの平均相場ですので、当該平均相場を用いて償却額を換算した選択肢4. が適切な解答であると考えられます。

市村 問題18は「四半期財務諸表」からの出題です。本問は、今回最も難易度の高い問題だったと思います。まず、正誤選択問題なので、選択肢の組み合わせで正答を出せませんからね。加えて、エが「誤り」とあるとは判断できると思いますが、それ以外はすべて正しそうに見えますよね。短答式全国公開模試で同様の問題を出題しているのですが、オが最も適切な肢だと判断できた方は少なかったのではないのでしょうか。

久野 次は総合問題の一問目ですね。

新井 問題19～問題25は「個別論点の総合問題」です。出題論点は、商品売買、貸倒引当金、有価証券、ヘッジ会計、有形固定資産、そして税効果会計です。

問題19はあまり解き慣れていない問題だったと思います。B商品及びC商品の売価、原価、利益に関する情報を上手く整理して連立方程式を解くことにより解答が求まりますが、片方は付加利益率が与えられ、もう一方は売上原価率が与えられていたり、値引や廃棄なども加味しなくてはならず、ややこしい問題です。後回しにしておくのが正解だったと思います。

しかし、問題19を除けば比較的容易に解答できる問題です。問題20～25についてどれだけ点を落とさなかったかがポイントになります。

久野 総合問題の二問目です。

新井 問題26～問題32は「連結キャッシュ・フロー計算書を含む連結財務諸表の総合問題」です。メインは連結財務諸表ですが、連結キャッシュ・フロー計算書が総合問題で問われたのは初めてですね。全体的に「何を計算すれば良いか」よりも「何を集計すれば良いか」が問われている問題です。集計漏れによるミスが生じやすい問題であったと言えるでしょう。

連結キャッシュ・フロー計算書に関する問題については、集計ミスの生じやすい部分が問われており、資料から数値を見つけにくいものもあるため、自分の答えに不安を持ちながら解答した方も多いと思います。したがって、連結財務諸表部分である、問題26～29を確実に解けるよう慎重に解答できれば良かったと思います。

久野 ありがとうございます。問題10は受験指導校で解答例が分かれるというか、「あるべき解答」を前面に出すか、「予想される正解」を前面に出すかで見た感じ異なった印象を与えるかもしれませんね。さて、1年前の平成25年第Ⅱ回短答式試験あるいは半年前の平成26年第Ⅰ回短答式試験の合格水準を前提として、短答式試験合格者として財務会計論でどれくらいの得点が求められるでしょう。

新井 財務会計論－計算では、まず、8点問題は、解なしの可能性のある問題10を除いた8問で考えます。正解に辿り着いて欲しい問題は、問題2, 4, 7, 11, 12, 16, 17です。本試験の緊張を考え、1問程度のミスを想定に入れると、8問中6問は正解したいです。

そして、総合問題2問では、個別論点の総合問題で問題20～25のうち5問、連結財務諸表の総合問題で4問程度、財務会計論－計算が得意な方であれば得点できると思います。7割程度得点できる計算ですね。

市村 財務会計論－理論としては、理論9問中、正答して欲しい問題は、難易度Aの問題1, 問題3, 問題5, 問題8, 問題9, 問題13, 問題15の7問ですね。難易度Bの問題14, 難易度Cの問題18のいずれかを正答できたとしても、本試験の緊張を加味すると、7問以上正答できれば合格ラインと言えるのではないのでしょうか。

久野 計算個別で48点、計算総合で36点、理論で56点、合計140点・70%ですか。ちょっと高めかな。後でじっくり検討しましょう。

新井先生、市村先生。ありがとうございました。

本試験をよりかえる



司会
久野 元靖 講師

最後に

久野 さて、改めて、受験生の皆さんが気にされる平成26年第Ⅱ回短答式試験の予想合格ラインを検討してみましょう。

特別座談会冒頭にも述べましたが、公認会計士・監査審査会は、短答式試験の合格基準は、「試験実施規則」により「総点数の70%を基準として、公認会計士・監査審査会が相当と認めた得点比率となり、1科目につき、その満点の40%に満たないもののある者は、不合格となることがある。」とし、「試験の公平性の観点から、第Ⅰ回短答式試験と第Ⅱ回短答式試験の合格得点比率は、原則として同じとします。」としています。

平成22年および平成23年短答式試験では、合格率・合格者数の乖離をものともせず、第Ⅰ回短答式試験の合格得点比率がそのまま第Ⅱ回短答式試験の合格得点比率とされましたが、平成24年短答式試験では第Ⅰ回短答式試験の合格得点比率は70%、合格者数は820人、合格率は6.0%でしたが、第Ⅱ回短答式試験の合格得点比率は67%、合格者数は454人、合格率は4.2%となり、初めて第Ⅰ回と第Ⅱ回とで合格得点比率が異なりました。平成25年短答式試験では第Ⅰ回・第Ⅱ回試験とも合格得点比率は67%でした。そして、平成26年短答式試験では第Ⅰ回短答式試験の合格得点比率は70%、合格者数は1,003人、形式合格率は13.7%、実質合格率は16.7%となっています。

平成25年試験以降、短答式試験の合格率が上昇しています。この短答式試験合格率の上昇は、おそらく、論文式試験受験者数が影響しているでしょうね。平成24年論文式試験受験者3,542人、論文式試験合格者1,347人。平成25年論文式試験受験者3,277人、論文式試験合格者は1,178人。今日現在の平成26年論文式試験受験確定者は2,592人。諸般の状況から、論文式試験合格得点比率も52.0%で維持しつつ、論文式試験合格者数は微減と仮定するならば、論文式試験受験者数が3,200人前後となっても不思議ではないことになりますね。

このような状況下で行われた今回の平成26年第Ⅱ回短答式試験の受験者数（願書提出者数）は6,567人と公表されています。

ここでは、データリサーチ等の受験生の皆さんの得点状況を見ることはできませんので、まず、各科目レベルで考えてみましょうか。

新井 財務会計論-計算ですが、個別問題では、解なしの可能性のある問題10を除いた8問で本試験の緊張感を考えると6問は正解したいです。個別論点の総合問題で問題20～25のうち5問、連結財務諸表の総合問題で4問程度、財務会計論-計算が得意な方であれば得点できると思います。

市村 財務会計論-理論では、9問中、本試験の緊張を加味すると、7問以上正答できれば合格ラインと言えるのではないのでしょうか。

安 管理会計論では、正解していただきたい問題を単純合算すると72点が合格ラインとなります。ただし、本試験の緊張感やケアレスミスなどを勘案すると、ここから1問分差し引いた66～67点くらいが合格ラインではないのでしょうか。

高橋 監査論では、70～75%といったところでしょうか。

田崎 企業法は、講師の話合いでは、68点前後ではないかということでした。

久野 財務計算個別48点+計算総合36点+理論56点+管理67点+監査75点+企業68点=350点(70.0%)。うん、この数字はちょっと上ぶれ気味ですよ。第Ⅰ回は最低線の足し算で357点(71.4%)でした。同じようにすると、344点(68.8%)になるのかな。

ここまでの、そして、ここからの推定は受験生の皆さんの協力による「データリサーチ」の結果を見ずに行っています。したがって、その内容次第では、TACの予想合格ラインは修正されるかもしれません。また、合格得点比率・合格者

数は、公認会計士・監査審査会によって決定されます。また、おそらくは、いくつかの問題で受験指導校の解答例が分かれることがあるかもしれません。過去には、受験指導校間で一致していた解答例が誤っていることになった場合もありますし、1つの問題について正解が2つあるとされたこともありますし、全員正解とされたこともあります。

さて...

(中略。この部分、議論が長くなりますし、諸般の事情もございますのでご容赦ください。)

久野 それでは、先生方、よろしいでしょうか。

5月25日、23時現在、予想合格ラインとして、

第Ⅰ回短答式試験合格得点比率である
総点数の70%が合格得点比率
となる可能性があります。

公認会計士・監査審査会が
昨年度・本年度第Ⅰ回で垣間見える趣旨と同趣旨で合格者数を考慮するならば
数% (1~5%程度) 低下する可能性があります。

合格発表の日までは
8月の論文式試験を意識した学習を
継続されることを願います。

とします。

なお、ここでお話した予想合格ラインは、TACの最終予想合格ラインではありません。この記事を皆さんがご覧になる頃には、「データリサーチ確定集計結果」も公表されています。必ず、「データリサーチ確定集計結果」を参照してください。

久野 今回の短答式試験、前回からの形式変更をそのまま踏襲した試験でしたね。次回の平成27年第Ⅰ回短答式試験からは「管理会計論」「監査論」の分離実施が公表されています。試験開始時間も前倒しされますので、受験をされる方は、公認会計士・監査審査会からの、また、TACからの情報をきちんと収集してください。

さて、関東のみならず、東海・関西、全国の講師の皆さん、お疲れ様でした。この後、「解説」作成業務があるかと思いますが、そちらもよろしくお願いします。

受験生の皆さん、お疲れ様でした。平成26年第Ⅱ回短答式試験が終了して、今、いろいろな想いを抱かれていますと思います。難しかったですよね。多くの受験生の方が同じ想いを抱かれていますと思います。自分の心がリフレッシュを求めているならば、ひと時のリフレッシュのための時間をとってくださいね。これを読まれる頃にはとくに学習を再開されているとは思いますが。

論文式試験合格を目標に学習を再開される方、ご自身のスケジュールがあると思います。TACの第2回論文式全国公開模試を目標にしながら、ご自身のスケジュールをこなしていってください。多くの講師が、弱点補強・弱いところをなくすようにと言っています。そもそも、論文式試験は「大問ごとに得点比率を算定」します。これは「穴」となる論点等がある

と大きなマイナスダメージが生じることを意味します。論文式試験の評価システム自体が「穴を作るな」になってるんですね。「平均点レベル」でもいいから「穴はなくしてください」。ただ、注意をしてください。試験が近づけば近づくほど「**良いものは維持し、悪いものは良くする**」方向に行かなきゃいけない。何度も言っていますが、第1回論文式全国公開模試で成績が悪かった科目が第2回論文式全国公開模試で成績が良くなる。第1回論文式全国公開模試で成績が良かった科目が第2回論文式全国公開模試で成績が悪くなる。第2回論文式全国公開模試で成績が悪かった科目が論文式試験で科目合格になる。第2回論文式全国公開模試で成績が良かった科目が論文式試験で足を引っ張る。珍しくないんです。試験直前期って今までに一番ハードな時期なんです。まだ、終わってはいない、短答式試験という関所を通り抜けただけです。論文式試験まで含めた個々人の成績の推移を見て思うことですが、まだ、可否は動きます。集中しましょう。あ、そうそう、最近、特に気になることが一つ。論文式財務計算総合問題を解く際に短答式財務計算総合問題の解き方をかたくなに守ってらっしゃる方が散見されますが、資料の読み落としとか集計ミスという言葉でご自身をごまかしていませんか。論文式財務計算総合問題にとってはリスクが高い方法を採用しているご自身に原因があったりして。

残念な結果を予想される方もいらっしゃるでしょう。人生の岐路に立っていると感じられる方もいらっしゃるでしょうね。ご自身が公認会計士試験に挑戦しようと思った時のことを思い出してみましょう。なぜ自分は公認会計士になりたいと思ったのか。公認会計士試験に合格するためにどんなことをどのように行ってきたのか。公認会計士になりたいという気持ちはまだあるのか。数年後の自分はどうかありたいのか。夢と現実の狭間で悩むこともあるでしょうし難しい問題だと思いますが、冷静さを持って様々な観点から慎重に考えていただきたいと思います。6月13日（金）にTAC八重洲校で行われる「**会計士受験生に贈る進路選択セミナー**」も参考になるかもしれませんね。

「本試験だと点が取れないんです」、こんな言葉で「成績相談・学習方法相談」に来られる方がいらっしゃいます。「そうなんですか。あ、確かに、答練の成績も悪くないですよ。でも、この得点の仕方はどうなんでしょうか。本試験だと点が取れないんじゃないかと、本試験では点が取れない勉強してるんじゃないですか。」誇張はしていますが、趣旨的には、よくある会話です。アクセス答練の成績、短答答練の成績、論文答練の成績にその兆候は出てるんですね。その兆候があるからと言って残念な結果になるわけじゃないですが、予想外で残念な結果になった方の成績には、別の明確な原因がない限り、ほぼその兆候が出ています。でも、その兆候が修正できたら余裕で合格されていくんですね。「本試験だと点が取れない」とか「本試験に弱い」なんて言葉を都合の良い言葉にしないでくださいね。

なぜ合格得点比率に届かなかったのかを考えることが大切です。いろいろなものを犠牲にして勉強しましたよね。なぜ点数が伸びないんだろう。基礎は大丈夫ですか。基礎だけにしていませんか。難しい問題を追っかけていませんか。学習方法が悪い意味での自己流になっていませんか。自分自身に「短答だけ」とかのリミッターをつけていませんか。短答式計算問題特有の解き方のみに頼っていませんか。短答式理論問題の○×だけ追っかけていませんか。間違えたら知識の補充だけで終わっていませんか。テキストより問題集が好きだったりしていませんか。自分で学習範囲を狭めていませんか。短答式試験で求められている「体系的かつ正確な知識」をつけるように工夫していましたか。まだ学習し終わってないからってことにして答練・アクセス答練をさぼっていませんか。通信で学習していて、答練の制限時間を無視していませんか。前向きに、自分自身に原因があると考えてみてください。

迷いがある場合には「**講師学習相談会**」「**電話学習相談会**」で相談してみましょう。

「**個別成績相談・学習方法相談**」なら私も承ります。あつ、よく相談に来られた受講生さんから言われる言葉に「恥ずかしいんですけど」なんて言葉があるんですけど、恥ずかしい成績も素晴らしい成績も見慣れていますから、気にすることはないですね。あ、絶句しつつ「今まで何をしていたの？」なんて口走ってしまったこともあります。そんな彼は今は試験合格者、ですね。

受講料が最大50%割引にもなる「**奨学生選抜試験**」もありますね。「**上級期学習法セミナー**」で時期別の学習法のヒントを聞くことができるでしょう。これらに出席すると「**科目別学習法レジュメ**」「**会計士受験生のための就活入門**」「**合格体験記**」を貰えたりして良いことがありますよ。

TACでは、「**短答科目強化期間**」「**論文対策強化期間**」をより明確にして12月の第Ⅰ回短答式試験の合格に全力を

注げる「上級Wチャンス本科生」を開講します。あ、ここで誤解しちゃいけないのは、「短答強化」といっても「短答特化」という意味じゃないですからね。短答式試験を受験するからといって「短答特化」するのは、多くの場合、遠回りの傾向があるようですね。少なくとも、「講義」が展開されている期間は論文式試験合格を目標にコアな体系的理解を作り上げ、同時に短答を強化する学習姿勢を忘れないことが重要です。

基礎力不足を痛感される場合には、基礎マスターレベルの計算力再確認をする「Re-view 講義」セットコースもありますので、是非、基礎力を充実させていただきたいですね。期間限定ですが「早割」を利用するとお得になります。もちろん、財務会計論・管理会計論の「短答対策アクセス答練」「論文対策アクセス答練」、租税法の「アクセス答練」、財務会計論-理論・監査論・企業法・経営学の「理論補強答練」も標準装備です。

短答式試験免除者・第Ⅰ回短答式試験合格者の皆さん。まさかとは思いますが、中だるみなんてしてないでしょうね。これからの残された時間は短答式試験受験者と同じですよ。時間的アドバンテージはもう消費してしまいました。頑張ってください。

短答式試験を受験された方、お疲れ様でした。TACは受験生の皆さんの学習をサポートしていきます。頑張ってください。

追記：久野 短答式試験当日の特別座談会では、「データリサーチ」の結果を見ずに、出題水準からの予想合格ラインを検討しています。先ほど「データリサーチ中間集計結果」を一瞥しました。「予想合格ライン」は修正する可能性がありますので、「データリサーチ確定集計結果」等を「@C.P.A.」等でご覧ください。